

電子書籍と図書館司書 ～「テキストと情報」をめぐる小旅行～

土 屋 直 之
(山形大学農学部図書館)

はじめに ～ 貸本屋のある風景

話を始めるにあたって、ある風景から入ってみましょう。

藤島隆氏は、「貸本屋独立社とその後継者たち」の中で、明治の終わり頃、札幌に開店した貸本屋「独立社」のようすを活写しています。以下は藤島氏が引くところの、独立社店主・足助素一の「営業」のようすです。

丁度、私が植物園の南側に二人の学生と一軒の家を借りていたころ、貸本の布呂敷包みを担いだ足助は、有島の名刺を持って、初めて私を訪れた。私は書齋にひろげられた何冊かの本のうちから、飯田旗軒訳の『巴里』（ゾラの原作）二巻をえらび出すと、彼は鋭く光る例の眼で私の顔をじっと見て、「一度に二巻は多すぎるでしょう。一巻宛借りたら、どうです」というので、私は面白いことをいう人だな、と思いながら上巻だけを借りた。その後、私はたまたま彼の店に立ち寄るようになったが、そんなとき女子学生などがやって来て、六カしそうな本を借りて行こうとすると、足助は「その本は君にゃ六カし過ぎるから、もっとやさしいものを借りて行き給え」などと、その少女に向かって忠告（？）しているのを、傍で聴いていて、微笑を禁じえなかったものである。（「貸本屋独立社とその後継者たち」47頁）

彼がそう忠告（？）するからには、手元にある本がすべて（すべてです）どんな本かわかっていて、また、お客についても、その人が書物を摂取する上で、どのような段階にあるか——次にどんな書物を読むべきか——も大体の判断ができていた、ということになりましょう。

私はこれを読んだとき、貸本屋と図書館という違いはありますが、ああ、これこそが理想の図書館司書ではないか、これ以上のものは望むべくもない、と思ったものです。

しかし、現実には、私たちは書物の——テキストの洪水に溺れそうになっています。私たちはどのようにしたら足助素一のようになれるのでしょうか。それとも、情報の洪水の中で、他に何かうまい立ち回り方があるのでしょうか。幾分大上段に振りかぶりましたが、本稿で扱う問題設定は、かようなことです。

1. 津野海太郎氏の語る「書物史の第三の革命」

今この時代、出版不況と言われているにも関わらず、書籍の出版点数は年間7万点以上

の水準を維持しているといえます。また、学術論文の生産件数もまた、右肩上がりであることは、改めて指摘するまでもないでしょう。

もちろん、ウェブ上のコンテンツの総量もまた、膨張を続けています。「現代社会はテキストで溢れかえっている——」。この言明に異を唱える人は、まずいないのではないのでしょうか。

本稿は、読者として図書館司書だけでなく、それを目指している方や愛書家の方にも読んでもらえると嬉しいと思って書いています。——読者の方々は、この状況に対し、どういう感慨を持たれているのでしょうか。

例えば、漫画家の佐藤秀峰氏は、自らの作品の二次利用自由化に際して寄せた文章の中で次のように述べています。

僕は今、情報はインターネットで検索して手に入れます。

玉石混合の情報の中から必要な情報を見つけ出すスキルが重要で、検索で補足できない場合は SNS を利用して、直接、有識者に教えてもらえる場合もありますし、手頃な情報に行き着かなければ、いよいよ書籍を検索して通信販売でそれを購入することもあります。

でも、僕はできれば本は買いたくありません。(中略)

インターネットを利用するようになってから本を読む量は減りました。

一方で活字を読む量は増えた気がします。

僕と同じような方も多いのではないかと推測します。

事実、本の売り上げはもう 15 年も連続して前年を下回っています。

本は重いし、場所をとるので部屋が狭くなります。('漫画 on Web' より)

別に佐藤氏が特殊というわけではありません。まるで私自身のことであるかのように、的確に言い表していると感じたので引用しました。

ここに典型として見出されるのは、矢継ぎ早にテキストを消費し読み捨てていく「読者」の姿です。

私事ながら、少し前に大学図書館職員長期研修を受講しました。その中で、逸村裕先生は、デジタルネイティブ(生まれたときからデジタル環境で育った人)は、文章を読まないわけではなく、幼い頃から携帯電話のメールや SNS に触れて育ってきており、むしろ端末上で短い文章を読んだり書いたりすることには慣れている——との知見を示されました。

テキストを高速で消費し読み捨てていくというふるまいは、そういったデジタルネイティブの文化と重なるように思えます。

さきほどの設問に対する答に戻りますと、私はとにかくものすごい気持ちの悪さを感じる。あるいは居心地の悪さとも言いましょうか。

図書館司書とは、本来足助素一がそうしたように、書物・テキストに言及し、読者(利用者)に助言する者であるべきだと思うし、単なる「情報」を届けるということは、現代社会においては、もはやほとんど意味をもたない行為だと思っています。

しかし、実際のところ現代において、足助素一のようにすることは、神様でもない限り無理ではないでしょうか。無限に増え続けるテキストを前にして、傲慢にも、あなたにはこの本がおすすめです、という資格が一体誰にあるのでしょうか。世の中のすべての書物を読んだ上で価値判断することは、もはや誰にもできないというのに。もちろん、私も個人的に人に本を薦めることはあります。しかし、それは個人の読書体験にもとづいて、私的に、友人として言っているのであって、世の中のすべての本を掌理する存在＝司書（書物を司る者）として言っているわけではありません。

私はよくアマゾンのおすすめやユーザーレビューを参考にして本を買います。アマゾンは——「Web2.0」は——ICTを用いることで、集合知という概念をつくりだし、擬似的に「世の中のすべての本を掌理する司書」であるかのようにふるまって消費者である私に奉仕してくれます。

こういった「テキストの氾濫」という状況下で、生身の一個人である、図書館司書としてできることは何があるだろうか。今、私達の存在意義がおびやかされているのではないか。こういった危機感からまったく無縁でいられれば、良いのかもしれません。しかし、あいにくと言うべきか、私は、それを切実なものとして、受け取ってしまいました。

ひとつには、図書館界が置かれている状況——例えば、指定管理者制度・委託など——とあまりに符号し過ぎてしまっているということもあります。図書館とは、テキストや書物を——文化を掌理する場所ではなかったのでしょうか。それを「委託」できてしまうということは、そこに預託されているものは、文化ではなく、ただの「情報」や「サービス」だとみなされているのではないか。

単に情報があふれていて、選別できないとか、捌き切れないとか、読み切れないとか、そういうことではまったくないのです。テキストに言及する、ということが図書館司書の本来の役割であったはずですが、しかし、情報の海の中にあるテキストに言及したとして、そのメタテキストもまた、生まれた瞬間に多量の情報の中に埋没してしまう。その無力感、飢餓感を多くの図書館司書が共有しているのではないのでしょうか？ 少なくとも私はそのように感じているのです。

本稿は、この問題に私なりに答を見出そうとするものです。それを私は同業の方々と分け合いたいと思う。もし、私と違う答にたどり着いた方は、それを私にそっと教えて欲しいと思います。

まずは——電子書籍です。

電子書籍が普及すると紙の本も図書館ももはや不要ではないか、という言説は、確かにキャッチーではありますが、私はそのような「危機」の可能性を論じる段階は、すでに過ぎ去ったと考えています。しかし、例え電子書籍が紙の書物へ与える影響がどうであれ、「テキストの氾濫」という状況には何の変化もありません。そして、そのことへの気づきを与えてくれたのは、電子書籍をめぐる諸状況・諸言説でした。ですから、私としては、問題の入り口としてこれを避けて通るわけにはいかないと考えます。

電子書籍については多くの議論がありますが、マネタイズの側面と、ガジェットとして

の機能の側面に言及したものが多く中で、書物史にまで踏み込んで、鳥瞰的な議論を提示してくれたものに、津野海太郎氏の『電子本を馬鹿にするなかれ』があります。

改めて述べるまでもなく、書物には長い歴史があります。津野氏は電子書籍を「書物史の第三の革命」だと言います。

本当に第三の革命になるかどうかという点はひとまず置いておいて、津野氏の著作の良心的なところは、第一と第二の革命について、テキスト学の書籍を紐解かずには得られない知識を紹介しながら、その意義を認め、それを踏まえて考察しているところにあります。

書物史の第一の革命は「書画革命」です。それは紙に記された書物の発明、すなわち「口述から筆記への転換」でした。第二の革命は「印刷術の発明」です。ルネサンス時代に印刷術が発明されたことで、それまで写本でしか作ることができなかった書物が大量に複製できるようになり、庶民が本というものに触れられるようになりました。

そして、どの革命においても、それまで少数のエリートが独占してきた知的な営みが、大衆化してしまい、変質してしまうことへの不安や恐れといったものから、そのつど知識人が警鐘を鳴らしてきたといえます。

第一の革命「書画革命」においては、プラトンが『パイドロス』の中でこう述べています。

ソクラテス「言葉というものは、ひとたび書きものにされると、どんな言葉でも、それを理解する人々のところであろうと、ぜんぜん不適當な人々のところであろうとおかまいなしに、転々と巡り歩く。(中略)自分だけの力では、身を守ること自分も助けることもできないのだから。(中略)(一方「父親の正嫡であるもうひとつの種類の言葉」とは)それを学ぶ人の魂の中に知識とともに書き込まれる言葉、自分を守るだけの力を持ち、他方、語るべき人には語り、黙すべき人々には口をつむぐすべを知っているような言葉だ」

パイドロス「あなたの言われるのは、ものを知っている人が語る、生命をもち、魂をもった言葉のことですね。書かれた言葉は、これの影であると言ってしかるべきなのではないでしょうか」(『パイドロス』藤沢令夫訳、岩波文庫)

つまり、教師から直接学ぶのであれば、教師は生徒の理解に応じた適切な教え方をできるが、一旦文字で書かれたものは、それにふさわしくない人でも、それを読めさえすれば摂取できてしまう。しかし、不適當に摂取されたテキストは、誤読されるかもしれず、また、誤読されたまま拡散してしまう可能性もある。だから、そういったコントロールできない言葉は、本来の言葉の「影」にすぎないのだと批判しています。

さらに、「第二の革命」では、印刷という書物の大量生産技術が、人間から「精読」の習慣を奪ってしまうという批判がなされたと津野氏は指摘します。これについては、大分時代は下りますが、作家の堀田善衛氏が1960年代にパリの国立図書館で初めてゼロックスのコピー機を使った時の「衝撃」を引いています。津野氏の引くところを重引します。

もはや、貴重な文献の筆写などという労は、勉強には無用無縁のものとなり果てたのであるか！

なんと便利な！

しかし、これは少々便利すぎはしないか…。(堀田善衛『本屋のみつくり』)

また、仏文学者でテキスト学の研究者でもある宮下志朗氏は著書『書物史のために』の中でこう述べています。

十八世紀後半くらいを境にして「読書革命」が起こったという説が存在する。それ以前の少数のテキストを何度も読み返すというインテンシブな読書から、多くの書物をいわば読み散らしていくエクステンシブな読書へと一挙に変化をとげたというのだ。そしてこの精読から多読へという変化が、読書行為の非神聖化を招来したと説明される。しかしながら話はそんなに単純なものではない。テキストの神聖化のひとつの指標とは、その運搬手段にある。乗り物がもたらす、隔たりの感覚のうちにある。地方の「貸本屋」は、その隔たりの感覚によって、時として過剰なファンタズムを付与していた。(『書物史のために』147頁)

こう述べて、貸本屋や「読書クラブ」、安価な本、人文主義者によるテキストの確定作業とその普及活動...といったものが、読書を庶民へと普及させた代わりに、その質を変質させたとしています。

さらには、本が売れなくなった、という現実に対して、早くも1960年代には「学生が本を読まなくなった」という嘆きが聞かれたとして、津野氏は俳人・中村草田男の「学生と読書」という随筆を引いています。

現代の生徒および学生——小学生から大学生にいたる各年齢層——が、戦前の時代に比較すれば、共通してほとんどといっていいくらいに、当面の課題範囲以外の読書に自発的につとめることが無くなりつつある。(略)電車内に席を占めている小学生は、ただその間の時間つぶしのためだけにはなはだニヒリスティックな無表情さで漫画本の頁を繰っているに過ぎない。(略)大学生たちは、これも同様に電車内での空白時間の大部分をチュウインガムを噛むことによってまぎらわしている。その時間内の彼らの頭脳中には意識の流れというような思惟の流れは存在していないのである。完全な空白の時間なのである。(中村草田男「学生と読書」)

耳が痛いような、的外れと言いたいような不思議な気持ちにかられますが、繰り返しますがこれは1960年代に書かれたものです。学生の読書離れというものは、ずっと前から指摘されていたということです。

人類はこのように、読書の変質という荒波を何度も乗り越えてきた。だから、今度の「第三の革命」もきっと乗り越えるだろう、というのが津野氏の主張です。

津野氏の予測によると、第三の革命(電子書籍革命)は以下の段階を踏んで進行します。

(第一段階)好むと好まざるとにかかわらず、新旧の書物の網羅的な電子化が不可避免的に進行していく。

(第二段階)その過程で、出版や読書や教育や研究や図書館の世界に、伝統的な私たちの書物には望みようのなかった新しい力がもたらされる。

(第三段階)と同時に、コンピュータによってでは達成され得ないこと、つまり電子化がすべてではないということが徐々に明白になる。

(第四段階)こうして、「紙と印刷の本」と「電子の本」との危機をはらんだ共存のしくみが、私たちの生活習慣のうちにゆっくりもたらされることになるだろう。

とにかくも、安易に紙の本は絶滅するなどと言わず、両者の共存を2010年という早い段階で、冷静に言明されていることは、すばらしいことだと思います。

第二段階で「教育や研究や図書館の世界に、望みようのなかった新しい力がもたらされる」とありますが、これは果たしてどうでしょうか。私のいる大学図書館では、電子ジャーナルが2002年に科学技術基本計画にもとづいて導入されて、今年(2012年)で11年目になります。その間、電子ジャーナルが革新的なことをもたらしたかと言えば、結果論だけ言えばそういうことはないのではないかと。確かに、時間の節約という意味では多大な貢献を果たしたといえるでしょう。さりながら、教育・研究になんらかのパラダイムシフトをもたらしたかという、そういうことは無いと思います。

第三段階で、紙の本の良さが再認識されるとしています。著者は戦場での読書という象徴的な例を挙げて、電子デバイスで読書をするものの「不便さ」を説明します。ですが、私の見るところ——すでに多く指摘されているように——電子書籍のデメリットは、2010年当時よりもかなり重いものとして認識されるようになってきているのではないのでしょうか。

最も大きいデメリットは、物質としての実体をもたない、所有権の移転がなされない、という電子書籍特有の性質に由来するものでしょう。

すなわち、電子書籍は人との貸し借りができない。中古品として売ることができない。しかし、最も致命的なのは、所有権の移転がなされないため、長期間保存することができない、ということです。現に今年、楽天が電子書籍リーダーkobo投入に合わせて、従来の電子書籍プラットフォームRabooを閉鎖するということがありました。これによって、ユーザーは購入した電子書籍をすぐに見られなくなったわけではありませんが、別の端末に移すことはできなくなりました。(2013年3月閉鎖予定)

つまり、どんなにがんばって保存しても、せいぜい端末の寿命である5～10年程度しかもたない、ということになったのです。この現実、愛書家には到底耐え難いことではないのでしょうか。5～10年程度しか保存できないものが、果たして「本」と呼べるのでしょうか。重要なことは、この問題が、特定のサービスベンダーに特有のことではなく、所有権の移転を伴わない電子書籍というメディアに本質的について回る問題だということ

とです。

著者は、歴史学者でハーバード大学図書館長を勤め、同大がグーグルブックサーチプロジェクトのパートナーとなることを推進した人物でもある、ロバート・ダーントンの言葉を引いています。

ようは、過去の統御という点で伝統的なメディアは電子的なメディアにまさる、
といいはる根拠はないのである。(略) 私についていえば、目下、私は索引カード
で一杯になった靴箱を数十かかえこんでいる。それらのカードは「われわれを本に
してくれ」とわめき立てるが、事実上、一冊の本に押し込めるには数が多すぎるし、
もはや管理することさえできなくなってしまった。これが、ここでひと跳び、電子
本へ取り組もう、と考えるにいたったゆえんなのだ。

(『電子本を馬鹿にするなかれ』76頁、津野海太郎訳)

ここで私はダーントンの、プラトンが発したのと同じ言葉を投げかけなければならない
ように感じます。すなわち、数十の靴箱を統御できる、情報をテキストとして編纂できる、
優秀な頭脳の持ち主には、電子化はすばらしいことかもしれない。しかし、そのあと、情
報の洪水の中に放り出される、私たちのような哀れな子羊はどうしたらいいのでしょうか、
と。

いや、私も歴史学を多少なりとも学んだ者として、ダーントン氏の言うことは非常に理
解できるのです。本誌所載の「図書館司書のための歴史史料探索ガイド」では、大日本史
料総合データベースやグーグルブックサーチの便利さを強調しました。

むしろ研究者であればテキストを集成して一瞬で取り出せれば便利だと、誰しも考える
でしょうし、もはやそれが無い状態など考えられない、という程の便利さです。しかし、
学生や一般人——一般ユーザーは、ただ大量のテキストを与えられても、その使い方がわ
からず、戸惑うばかりです。では、その使い方を教える役割を担うのが図書館司書である
……？ 果たして本当にそうでしょうか。確かに情報リテラシーでは、「情報」の探し方、
扱い方は教えられます。しかし、テキストにどのようにして居場所を与えられるかは教え
られません。

津野氏は最後に電子書籍とエコロジーのかかわりを述べて、稿を終えています。すなわ
ちすべての商品が大量生産になる時代、特に経済成長をとげる中国が日本と同じように紙
を消費しだしたらどうなるか。未来の地球環境のために、電子書籍は必須なのだと。

確かに、その事自体は重要な指摘だと思います。しかし、地球環境や資源不足の問題は、
全人類・全産業にわたる問題ではないでしょうか。私には、電子書籍化の根拠をエコロジ
ーに求めるのは、率直に言って、書物・テキストのあり方についての真剣な格闘からの逃
げと映りました。言い換えれば、今まで読書文化について説いてきたはずなのに、突如と
して出版業という実業の視点で説くことに違和感を感じました。

津野氏は、第三の革命に先立って、2つの革命があったことを指摘して、私たちをテク

ストの氾濫から抜け出すための階段の入り口に立たせてくれました。電子書籍の前に、すでに書物はあふれかえり、テキストは氾濫していました。そのようにしたのは、結局のところ資本主義社会、ないしは人類史における「近代」そのものであり、電子書籍はテクノロジーとマーケティングによって、その状況に対応すべく考えだされた一商品にすぎない。すなわち、電子書籍それ自体は、書物の歴史にとっては薄皮一枚の意味しかないということです。本書はその気づきを与えてくれました。

しかし、津野氏が2つの革命に言及したのは、電子書籍が第三の革命であり、人類はそれを乗り越えられる、ということを帰納的に説明するためでした。新しい機能の宣伝といった「親切の押し売り」をせず、愛書家の立場にたって、電子書籍をめぐる状況を説きほぐしたのは、出版界の良心が具現化したものと私には映ります。しかし、意地の悪い見方をすれば、電子書籍という新しい商品を迎えるに当たって、売る方・買う方それぞれの地固めをするための言説にすぎないとも言える。

私は津野氏の言説の先に、テキストの氾濫という荒野を見たのでした。津野氏の発したメッセージは、電子書籍という「革命」をただ消費者として座して受け入れれば、やがてその状況に人間は慣れるという、要するに「待ち」の言説です。電子書籍については確かにそうでしょう。私も電子書籍は市場に定着すると思うし、一方で紙の本を駆逐したりもしないと思う。だが、そのことは、テキストの氾濫という荒野に立つ我々に何の救いももたらしはしません。待ちの姿勢では私たちを取り巻くこの状況を変えることはできない。能動的な「何か」が必要です。

2. スローターダイクの語る「書物の死」

ペーター・スローターダイクは、ドイツの主要なポストモダン派の思想家の一人とみなされています。彼は90年代末に発表した『「人間園」の規則』の中で、戦後ドイツの思想界を牽引してきたフランクフルト学派を強く批判しました。このことが元となって論争が生起し、ドイツ思想界はポストモダン状況へ移行したと言われています。

その『「人間園」の規則』の中で、スローターダイクは「書物は死んだ」と述べています。これはどういうことでしょうか。

書物とは、まだ見ぬ未来の友人に宛ててだされた宛先のない手紙である、とスローターダイクは言います。受取人の定かで無い書物＝手紙を受け取ること、そして、受け取った人がさらに未来の友人に宛てて手紙を書くこと。この繰り返される「連鎖手紙」の伝統という、友愛の振る舞いによって、人々は「教養」を身につけ、また、「国民」の帰属意識を醸成してきました。すなわち、人文主義とエトニ（民族の集合としての国家）を形作る役割を果たしてきたのです。

スローターダイクは、この連鎖手紙＝人文主義的教養の淵源を古代ローマにまでさかのぼります。円形闘技場で死に至るまでの格闘技という、血なまぐさい娯楽に興じていた人々は、非人間的＝非人文的なやり方で、飼いならされていたのだとします。そして、それを人間的＝人文的に切り替えるための闘争がおこなわれ、その結果選択されたのが人文

主義、すなわち書物による友愛の伝達という手段だったということです。

しかし、今、その人文主義＝書物も危機に瀕しています。書物によらずに多量に言説を撒き散らすマスメディアの登場によって、書物はその本来の役割を失った。すなわち書物は死んだとスローターダイクは言います。該当の箇所を引いてみましょう。

国民的市民的な人文主義の時代が終焉したのは、愛の靈感を与えてくれる手紙を友人たちによって構成される「国民」に向けて書く技術だけではもはや——たとえこの技術がプロフェッショナルによって行使されたとしても——近代的な大衆社会の住民の間のテレコミュニケーション的な絆を結ぶのに十分でなくなったからだ。第一世界においてメディア的な＝媒介された大衆文化が1918年以降（ラジオ）、そして45年以降（テレビ）成立したことを通して、更には、現在のネット革命を通して、現代社会における人間の共生は新しい基盤の上に立たされている。現代社会がポスト文芸的、ポスト書簡的に、そしてそれゆえにポスト人文主義＝ポスト人間的に規定されていることは容易に証明できる。（仲正昌樹編訳『「人間園」の規則』31頁）

2010年代にいる私たちは今、情報・テキストの氾濫という現実を知っています。だから、スローターダイクの洞察力に目を見張らざるを得ない。確かに、ラジオやテレビの普及は書物によるコミュニケーションを大いに陳腐化させた面はあるでしょう。しかし、その後のウェブによる「情報爆発」はそれを大きく上回るインパクトでした。90年代末の時点でそれを喝破した慧眼は恐るべしと思わざるを得ません。

しかしながら、そうであるということは、逆説的になりますが、私たちは、スローターダイクのおかげで、人文主義の死＝書物の死がインターネットの発達によってもたらされたのではなく、マスコミュニケーションの登場とともに進行しつつあったのだということを、遡及的にわからせてもらったと言えるのです。ちょうど、津野氏が電子書籍の前に2つの革命があったことを提示して、私たちに書物史の理解を促したのと同じように。

書物＝人文主義が死んだ現代の世界においては、古代ローマのように、人間の「野獣化」が進むとスローターダイクは言います。現代社会は人間が「野獣化する傾向と飼いならす傾向」の闘争の場となっています。ドゥルーズ＝ガタリ的な欲望を肯定される状況が生まれ、これこそがポストモダンの状況とされています。

今や書物は、局留めの郵便物のように、あるいは古文書のように誰にも顧みられなくなり、かつての人文主義者は古文書館の職員に取って代わられたとスローターダイクは言います。これも少し長くなりますが、該当箇所を引用します。

プラトンの営みから二千五百年経った今となっては、神々だけでなく、賢人たちも引き籠もってしまい、私たちをあらゆることに関して、無知と生半可な知識の中に置き去りにしていったように思える。私たちにって賢人たちの代わりに残されたのは、荒涼とした輝きを放ちながら、次第に闇の中に包まれていく彼らの書物＝

エクリチュールである。依然としてそうした書物は、何らかの形でアクセス可能に編集されて存在し、何故今でも読まれるべきかはっきりしさえすれば、読まれうる状態になっている。まるでもう引きとりに来てもらえない局留の手紙のように、静かな本棚に佇んでいるのが、エクリチュールの運命だ。それらは、もはや現代人には信じることのできない知恵の写し絵あるいは幻像だ。それらは、依然として我々の友人であり得るのかどうかさえ分からない作家たちによって投函されたのだ。

もはや配達されない郵便物は、可能なる友人に対する発送物＝使命で有ることを停止する——それらは古文書化された対象となる。このこと、つまりかつては規範になっていた本が次第次第に友人への手紙であることをやめ、もはやその読者が昼間仕事に使っているテーブル、そしてナイト・テーブル（寝室用サイド・テーブル）の上にはなく、古文書の無時間性の中に埋没してしまったことによって、人文主義の運動はこれまでに経験したことのない大きなうねりを与えられたのである。古文書館の職員が、テキスト的な古代にまで下って行って、かつての発言を現代に生きる見出し語として引き合いに出すことはますますまれになっている。恐らく、そうした死に絶えた文化が保存されている地下室での調査に際して、長い間読まれていなかった紙が、あたかも遠くの稲妻の火が燃え移ったかのように、ちらちらし始めるといことは繰り返し起こるだろう。古文書の地下室も明るみになり得るのだろうか？ 全ては、古文書館職員と古文書研究者が人文主義者の後を継いだ、ということを示している。依然として古文書の中を見て回っているごくわずかの人は、以下の様な視点を獲得するだろう。我々の生は、もはやどこから投げかけられたのか忘れられてしまった問いに対する、混乱した答えである、という視点を。（同 82頁）

まさしく、さもなりなんと膝を打たざるを得ない、見事な洞察です。古代から近世において、友人からの手紙であった書物は、テキスト＝情報の氾濫によって、その受け取り手を失い、私たちはまさに情報の洪水の中で、郵便ポストへ手を延ばすことをやめてしまった。

情報爆発によって、高度化・専門化・細分化した各ディシプリンの書物は、それぞれの専門家でなければ読めないようになってしまいました。当然の帰結として、古代からのすべての書物を掌理する愛すべき人文主義者たちは姿を消してしまいました。学問のディシプリンが細分化されたのと歩調を合わせるようにして、哲学者も「大きな物語」について語るのをやめ、世界は無数の「小さな物語」に収束していくことになりました。

キリスト教世界を形作った三大要素のことをコルプス・クリスティアヌムと言います。ギリシャ哲学・キリスト教・ローマ法の3つです。柄谷行人氏は、「近代」を形作った新たなコルプス・クリスティアヌムとして、「国民国家」「資本」「ネーション（＝民族国家・エトニ）」の3つを挙げています。ここで今更のように言うのもおかしいのですが、私たちはこれまで、マスメディアの普及や印刷術の普及を、書物の革命をもたらしたものとして指摘してきました。しかし、当然ながら、これらは根本的には「近代」によってもたら

されたことを忘れてはなりません。

私たち、人文主義者であるところの図書館司書は、古文書館の職員になるほかないのでしょうか（念のための注：私はアーキビストの仕事を心から尊敬しています）。

その答えはスローターダイク自身が述べています。すなわち、「テキスト的な古代にまで下っていった、かつての発言を現代に生きる見出し語として引き合いに出す」ことによって、「野獣化する傾向と飼いならす傾向」の闘争の一方に助力するということです。

しかしながら、私自身の反省も踏まえて言うのですが、現実には、その反対にポストモダンのな——既存の秩序に敬意を払わないような、あるいは新規のものに飛びつくような振る舞いが、図書館の外からも、また、図書館の中にあっても、大いになされている現状があります。

スローターダイクは、あくまでもポストモダン派の思想家であり、人文主義的なアイデンティティをもつ図書館にとって、必ずしも未来への前向きな提言を残してくれたわけではありません。しかし、例えば前章で触れた「図書館の味方」でありながら情報の奴隷であるような、ダントンのような言説よりも、私にはスローターダイクの舌鋒鋭い箴言の方が、図書館にとって現状を認識し、自己を規定するのに有用なエクリチュールとなると思えます。

書物は死んだ、というスローターダイクの言明を読み取るに際して、読者に何か抵抗感があるとしたら、それはまさに幸いなことです。日本には日本独自の「文化資本（ハビトゥス）」があり、それは（ひとくくりに申せば）主に儒教によってもたらされたものです。スローターダイクの言う人文主義や教養主義は、近代以後に持ち込まれたものですが、それらは儒教文化と混淆して今の日本文化を形作っています。儒教圏には儒教圏の価値観・肌感覚があり、西洋哲学の言説をそのまま当てはめることはできないことはよくわかっています。ただ、儒教文化の面にまで言及することは、私の力量に余り、紙数の面からも難しいことですので、事態を単純化するために、西洋の言説の紹介に留めることはご理解ください。

さて、「書物が死んだ」世界で私たちは何をなすべきなのか。次節ではそれを考えたいと思います。

3．ルジャンドルの語る「中世解釈者革命」

前節で近代を生んだ三角形「国民国家」「資本」「ネーション（＝民族国家・エトニ）」について申しました。

近代的な意味での図書館とは、まさに近代になってからできたものであることは周知の事実です。近代によって書物の死が宿命付けられていたとしたら、図書館とは、初めから滅びをプログラムされた人類史の徒花に過ぎないのでしょうか。

ここで私としては、人文主義＝書物と近代との因果関係をときほぐしていくには、そもそも、それがどうして成立したものなのかを紐解いていく必要を感じます。そこにこそ、図書館が再生するための手立てを見出すヒントがあるように思えます。

ここでは、フランスの宗教史家であるピエール・ルジャンドルの著作に依拠して、話を進めていくことにします。とは申しても、私は残念ながら、ルジャンドルのテキストと正面から格闘する技量を持ちあわせません。本邦におけるルジャンドルの紹介者であるところの、佐々木中氏の言説を引きながら進めていくことをどうかご理解ください。

氏の述べるところによると、ルジャンドルの最大の功績のひとつは、書物史の革命でありまた、近代以降のすべての革命の母である「中世解釈者革命」を見出した点だと言います。

先に書物史の2つの革命の話をしました。それは書画革命と印刷術革命でした。しかし、実はこれらは、技術の発明に過ぎません。本当の革命は、技術の革命に先行して、人の生の営みのあり方の革命として起きるのです。

「中世解釈者革命」を理解するには、いくつかの前提となる認識の共有が必要となると思います。——すなわち、情報・文学・テキストについてです。

まず、「情報」とは何か。

佐々木氏は、あらゆる出来事に言及しようとする「名誉心に苦しめられている人々」のもとに「懐妊の深い寡黙」は決して訪れない、というニーチェの言葉を引いたのち、次のように言っています。

ありとあらゆるものについて、「すべて」について、「それ知っているよ、これこれこういうことでしょ、それってそういうものに過ぎないね」と脊髄反射的に言えるようになること。それによってメタレヴェルに立ち、自らの優位性を示そうとすること。これが思想や批評と呼ばれていたし、今でも呼ばれている。そこでは誰もが「すべて」について「すべて」を語れるようになりたいと思っているかのようである。(中略) 知、情報というものは、これほどまでに人を病み衰弱させるものかと思いました。私は大学を卒業した人間がほとんど居ない、裕福ではない東北の家の生まれで、自身も高校を中退しているような人間です。こうした知や情報の考え方を前提としている思想や批評のあり方というものに、当時はまだ薄らかったとはいえず生々しく違和感を持つことになったのは、そのせいなのかもしれません。(中略)

ジル・ドゥルーズの力強い言葉がありますね。「墮落した情報があるのではなく、情報それ自体が墮落なのだ」と。ハイデガーも、「情報」とは「命令」という意味だと言っている。そうです。皆、命令を聞き逃していないかという恐怖に突き動かされているのです。情報を集めるということは、命令を集めるということです。いつもいつも気を張り詰めて、命令に耳を澄ましているということです。

(『切りとれ、あの祈る手を』16頁)

情報とは命令だということです。図書館ほど「情報」を大事にしてきたセクションはまずない。だから、図書館員にとってはアイデンティティをおびやかされたような気分になる、非常に不吉な言明です。しかし、振り返ってみて、みなさん、情報に追い立てられる生活をしていませんか？ ツイッターやフェイスブックのタイムラインを数時間遮断された

だけで、イライラしてきたりしないでしょうか。携帯電話が使えなかったら、どうでしょう。私は現にしていたので、この言葉が恐怖とともに心に突き刺さったのです。まずはこの言明を押さえておいて下さい。情報とは命令だということに納得しづらい方には、インターネットが私たちの認識や能力に与えるネガティブな影響を説いた書物として知られる、ニコラス・カー『ネット・バカ』の一節を引いてみましょう。2009年には、アメリカの20代の若者がネットに費やす時間が週19時間以上となっていることを指摘した後、著者はこう述べます。

ネットにあてられる時間は、テレビの視聴に費やされていたはずの時間から都合されていると考えられることがしばしばである。だが、統計が示唆するのはその仮定とは別のことだ。メディア活動研究の大部分が示すのは、ネット使用時間が増大するとき、テレビ視聴時間は横ばいのままであるか、増加するかだという事実である。(中略) ネット使用が増えるにつれて確実に減少していると思われるのが、印刷物を読むのに使われている時間だ——特に新聞や雑誌であるが、本についても当てはまる。(『ネット・バカ』 125頁)

マイスペースやフェイスブック、ツイッターといった SNS の隆盛により、近年、加速は最大限に達している。これらを提供する企業は、その何百万もの会員に対し、「リアルタイムアップデート」すなわち、ツイッターのスローガンが言うところの「いまどうしてる?」に関する短い情報の、途切れることのない「流れ(ストリーム)」をもたらしめている。親密で私的なメッセージ——かつては手紙や電話、ささやき声の領域にあったもの——を、新形態マスメディアの材料に変えることで、SNS は人々に対し、強迫的な社交形態を新たに提供した。またそれは、即時性をまったく新しく強調するものでもあった。(中略) 最新の状態にいつも追いついているためには、メッセージ到着の知らせをつねに見張っていなければならない。(同書 219頁)

ネットにあてられる時間は、書物を読む時間から捻出され、タイムラインの発明とともに、人々は強迫的にいつも情報に追い立てられている。ただ、それは現在の状態ではあるのですが、大切なのは、情報というものの本質はずっと以前から同じであるという言明の方だと考えます。私は現に今、情報がそういうものである以上、情報の本質とは命令なのだという言明に同意せざるを得ません。

次に文学とは何か。佐々木氏は文学という言葉が、遠い過去においては読み書きの技法一般を意味しており、詩や小説のような「芸術としての文学」は元々の意味から分化した新しい意味だと言います。

文学というのは英語で literature ですが、(中略)これはまず書くこと、書き方、そして読み書きに必要な文化的な学識一般を意味していました。次にある問題に関

して公刊された著作の総体を意味していた。今で言う「文献」や「書誌」に近いでしょうか。(中略)現在流通している意味での「文学」、すなわち美しかったり娯楽のためだったりする言語藝術作品としての「文学」という意味は、一八世紀になってやっと現れます。(中略)

「文学」とは、読みかつ書く技法一般のことでした。いまはこの意味はリテラシー(literacy)という意味が担っていますが、もともとは文学こそがこの意味だった。(中略)ラテン語の用例をもっと遡れば、次のようなことが明らかになります。すなわち、文学とは「聖典を読み、聖典を編纂し、またそれについての註釈を、神学書を書く技法」である。(中略)つまり、法や規範や制度にかかわるテキストをめぐる技藝(アート)をも文学と呼びうる。何が正典であり、外典であり、偽典であるのかを選択したり、本を一冊に編集したり、翻訳したり、写本をつくったり、註釈書を書いたり、といったことをすべて含めて。(『切りとれ、あの祈る手を』42頁)

つまり、文学とは書かれたもの一般であり、法でもあった。これは真実なる言明です。我が国における「文学」概念の変化について、下西善三郎氏は漱石の文学観を例にして次のように述べています。

実際、「文学は斯くの如き者なりとの定義を漠然と冥々裏に左国史漢より得たり」と漱石がいうとき、漱石のなかでは、『春秋左氏伝』や『国語』、『史記』、『漢書』が純粋な言語芸術としての「文学」すなわち「純文学」であるとは理解されてはいなかったであろうから、漱石が「漢籍」によって「漠然と冥々裏に」獲得していた「文学」概念とは、「広義の『文学』」を意味するものであったとみななければなるまい。(「古典文学の受容における漱石・龍之介の位置」3頁)

我が国の文学という語は、literature を翻訳して輸入されたもので、当然、そのなりたちが西洋と同じとは言えないにせよ、「左国史漢」は単純な歴史書というよりは、道德の書、すなわち法の上位に位置する書としての意味を体していたのですから、東洋における「文学」もルジャンドルの言う「文学」と相似していると言って差し支えないでしょう。文学に関連して、「テキスト」について氏はこう述べます。

ルジャンドルは一見きわめて奇妙なことを言う人なんですね。つまり「テキスト」は「文書」であることを必要としない、とね。普通テキスト、テキストっていったら書かれた文書のことです。文書というのは、普通情報が書いてあるわけです。情報を手に入れるための道具、情報を載せて運ぶ「運搬機」ですね。でも、そもそもテキスト(texte)とは何か。(中略)そもそもは織物あるいは絡み合い、という意味なんです。(中略)もっとはっきり言うと、ルジャンドルにとって「テキスト」というのは、たとえば黒人のダンスです。(中略)アクセサリー、いろとりどりの

服装、刺青、楽器、音楽、メロディ、リズム、歌詞、そしてダンスの振り付けは、何を意味しているか。彼らの神話を意味している。彼らは彼らの神話を——もっと言えば「法」を舞っているわけです。(中略)

ルジャンドルにとって、こういうことすべてが「テキスト」なんです。詩も、歌も、ダンスも、楽器も、リズムも、蜜の味も。あるいはさりげない日常の挨拶とか、挙措とか、表情とか。そうしたもののすべてが「法」を意味し、「法」を読むことであり、読み変えることであり、書き変えることであり、書くことでありうる。彼はそう考えるんです。それらは純然たる法であり、規範であり、政治であり、またその変革である。何の不思議もありません。なぜなら、まさに彼らはそのことによって、自らを統治してきたのですから。(中略) こうして見れば「テキストは文書であることを必要としない」と言う意味がわかるでしょう。(同書 154頁)

テキストは文書であることを要件としない、ということは文化人類学を少しでもかじったことのある者にとっては、そうそう珍奇な言明でもありません。たとえば、安達義弘氏はアフリカの牧畜民ヌアー族の時間表現について、エヴァンス＝プリチャードを引きつつこう述べています。

ヌアー族は時間を示すのに月の名前を用いず、「キャンプ開始の頃」、「除草の頃」などと作業内容によって表現する場合が多い。1日の時間も「牛舎から家畜囲いへ牛を連れ出す時間」、「搾乳の時間」などと諸作業によって区切られている。彼らは、「乳搾りの時間に帰ってくるだろう」という表現をするのである。つまり、ヌアー族にとって時間とは(中略)社会的諸活動の連続として表現されるものなのである。したがって、ヌアー族にとって時間は均質なものではないし、また、節約したり、浪費したり、縛られたりするものとして考えられることもない。(『人類学のコモンセンス』194頁)

ここでは、ヌアー族の歴史や時間の捉え方が述べられているわけですが、統治に必要な情報＝テキストという意味では、それらは法や規範と同質のものです。歴史学者や哲学者は、書かれたものとしてのテキストが残っていない時代のことを、残っているテキストから思弁するほかなく、群盲象をなでるということにならざるをえませんが、他方、文化人類学者は、現にそこに暮らしている未開社会を対象とするため、文字や書物がなくてもテキストがある状態というものをきわめて明瞭に捉えられるというわけです。

文書ならざるテキストに言及したものとして、もう一例挙げてみましょう。宮下志朗氏は、教授と学生の対話に仮託した「中世の読みをめぐる対話」という文章の中で、本稿第1節で引いたプラトン『パイドロス』の該当部分に言及した後、こう述べています。

K 要するに「文字」は「言葉(パロール)」の影にすぎないのですね？

M うん、そもそも中世前期までは「声」が、「記憶」が決定的だったことを忘れ

ちゃいけない。たとえば土地の所有権争いの場合だって、共同体の古老の「記憶」による証言が決め手になっていた。そうした「記憶」と、財産や権力を示す「象徴物」が正当性の根拠とされたんだ。土地を与えたり、権力をゆだねる時には、「声」、剣のような「象徴物」、そして「証人」という三点セットによる儀礼がとりおこなわれていたのだからね。「記憶」は「儀礼」と表裏一体のものだった。口頭による証言ではなく、証書などのエクリが法的効力を有するのは、もう少し後のことだからね。（『書物史のために』15頁）

中世前期における裁判では、「記憶」「声」「象徴物」がテキストとして機能していたということです。ここで大事なのは、文書ならざるテキストを奉ずる社会が、私たちの社会に接続するものとして、確かに存在していたということです。その接続こそが大事なものであって、そうでないと、未開社会で文字が存在しないのは当たり前じゃないか、という開き直りしか残らなくなってしまいます。

さて、これでやっと前提条件の共有が完了しました。本題となる「中世解釈者革命」に話を進めることにしましょう。

「中世解釈者革命」とは何か。そこで生起したことがらだけを端的に述べるとこうなります。11世紀末、ピサの図書館で「ユスティニアス法典」全50巻が「発見」された。そこには、西ローマの滅亡とともに、西欧世界で久しく忘れ去られていた、精緻な法体系が保存されていました。それを読み解いた、当時の聖職者たちは、過去の巨大な遺産であるローマ法をもって、現行法である教会法を書き変えるという大事業に取り組みます。次いで、これに刺激されて、世俗法も次々と書き換えられていきます。一連の法改正は、12世紀半ばの『グラティアヌス教令集』にその成果が集成されて、「革命」はここに達成されました。

しかし、これのどこが偉大な革命なのでしょう。一見して生起した事実の地味さからは、その重要性がまるでわかりません。もし、私の説明が至らなければ、ぜひ佐々木氏の本を紐解いてください。とても良い書物ですから——。佐々木氏によれば、この革命により、様々なものが生まれました。例えば、「主権」。ローマ法の体系を得たことで、教皇は初めての「主権国家」になりました。例えば、「歴史」。それまで、どちらかといえば茫洋とした物語的な歴史書しかなかった段階から、きちんと史料に依拠した「歴史学」が生まれたのは精緻なローマ法の影響だと言います。例えば、「法人」。近代的な株式会社はもっと後になってからの成立ですが、その前段階としての契約制度や信託制度はこの「革命」から生まれました。すなわち近代の母体としての資本制を生み育んだということです。

こうしたことを総合して、端的に言って、何があったのか。それ以前の時代との断絶の根本は何なのか。突き詰めるとそれは、情報革命だと佐々木氏は言います。

革命の担い手たちは法学者として、かのユスティニアス法典を徹底的に読むわけです。読み、読み変え、書き変え、書く。（中略）しかも相手にするのが法文です。これから適用される法です。一言一句ゆるがせにはいけない。大げさに言えば、

変に誤訳したら人が死ぬ。ルジャンドルは「これは文法学者の革命なのだ」と言っている。徹底的に文法的に正確にやる。絶対に誤訳は許されない。(中略)そして、意味が上手く通らないところ、読みづらいところに註釈をつけます。ちょっと直訳すると意味が通らないところを、意識したり修正します。解釈を少しずつ更新していきます。(中略)どんどん分厚くなって、裁判の現場では役に立たなくなってくる。なら抜粋して要約を作らなくてははいけません。(中略)そしてまた、索引を作らなくてはなりません。分厚い本の徹底した索引を一度でも作ったことがある人はわかると思いますが、これはかなり辛い仕事ですよ。(中略)つまり「データベース」として法文を「検索」できるようにしたわけです。

(『切りとれ、あの祈る手を』152頁)

中世解釈者革命によってもたらされた断絶は、ここに関わるものです。テキストが文書になる。テキストは情報の器になる。情報だけが法や統治、そして規範にかかわるものになる。もはや法は歌われず、法は踊られず、法は纏われなくなる。法は飲まれず、法は奏でられず、法は韻を踏まれなくなる。(中略)客観的で合理的で中立的で普遍的で記号化できる、つまりデータ化される世界、データベース化できる世界。(中略)しかし、そこでテキストはさまざまな可能性を失い、縮められ削られ切り詰められることになった。テキストは情報にすぎないものになった。(中略)法や規範や政治は、情報が暴力かという二者択一の袋小路に陥ることになった。

(同書 157頁)

このようにして、テキストは情報になった。その世界の延長線上に今我々は生きています。テキストの氾濫という現象から出発して、私たちは、ついに情報としてのテキストが生まれる水源にたどり着きました。

しかし、この現実を前にして、私たちは一体何をなすべきでしょうか。佐々木氏は「革命」は今からでも成し遂げられる、といいます。つまり中世解釈者革命も人間が成したものである以上、テキストが情報でなかった時代に戻ることは可能だと。心強いことばです。しかし、果たして本当にそうでしょうか。

テキストが情報でなかった時代に戻ることは、極めて非効率な統治に戻ることを意味します。我々人類は、「近代」——すなわち資本・国民国家・ネーションの三位一体によって、果てしない富と繁栄を手に入れましたが、それを手放した途端、財貨はもちろん、今生きる人々の命まで維持できなくなることは自明です。

「近代」を超克しようとしたポストモダン思想は、結果としてマルクス主義のような「大きな物語」が支配する世界を終焉させたものの、近代そのものを乗り越えることはできませんでした。そして、ポストモダン状況は私たちの世界に「大きな物語」に代わり、無数の「小さな物語」を招き寄せました。「小さな物語」について、仲正昌樹氏は次のように述べています。

オタク的な小物語のネット上での緩いつながりだけからなる非人間的な「世界」コジェーヴやフーコーの予言が成就したような世界を前提にすると、「思想家」の役割というのは当然、極めて限定的なものになる。”偉大な理論”を体系化しても、それはネット全体を導く「大きな物語」へと発展できない。”思想家”なるものはせいぜい、ネット上で流通している「小さな物語」間の交通整理くらいしかない、ということになりそうだ。(『集中講義！日本の現代思想』224頁)

仲正氏の言明は、今までたどってきた「テキストの氾濫」状況への解について、また違った方向から、答えを出していると言えます。すなわち、無数の言説が飛び交っている現代においては、どんなに声高な主張をしても極小の意味しか持てない、ということです。

しかし、それでも、と私は言いたいです。「小さな物語」、すなわち、自分のいる図書館、本のある空間、その周りだけでもいい。近代のコルプス・クリスティアヌムに依存しながらも、ミクロな形で、テキストに本来の彩りを取り戻させてやることはできなくはないのではないかな。なんとすれば、私たちの周りには、今もって、幸いにも、書物があるのですから。

ここまで縷々言葉を積み重ねてきました。ここで改めて述べるのもおかしな話ではありますが、念のため誤解のないようにしておくべきかもしれません。つまり、ここまでスローターダイクやルジャンドルに依拠して述べてきたことどもは、いわば私の「信仰告白」のようなものです。ここまで述べたことをもって誰かを説得したいとか、業界を動かしたいとか、そういうことは全くないのです(「小さな物語」についてはすでに述べました)。佐々木氏は、再度の「革命」は可能だと述べています。それについてどう考えるのであれ、何かをなそうとすることは、息苦しさを伴うかもしれません。多量の「情報」は「近代」によって、必要とされ、必然性をもって生み出されたものです。今、この時代を生きるにあたっては、「情報」のシャワーを浴び続ける方が、どれだけ楽に生きられることでしょう！しかし、司書という、書物を司るということを生業としているからには、私はテキストの氾濫という現実に向き合わざるをえないと考えました。もう一度だけ、佐々木氏の言葉を引いてみましょう。

しかし、考え、書くという営みに挑もうとするときに、私にはこのニーチェの言葉が忘れられなかった。彼の本を読んだ、というより、読んでしまった。読んでしまった以上、そこにそう書いてある以上、その一行がどうしても正しいとしか思えない以上、その文言が白い面に燦然とかぐろく輝くかに見えてしまった以上、その言葉にこそ導かれて生きる他はない。その一行の文字の黒みの、その光に。だから私は情報を遮断した。無知を選び、愚かさを選び、二者択一の拒否を選び、アンテナを折ることを選び、制限を選んだ。あるいは報い無さを、無名を、日陰をね。(中略)

滑稽だと思いますよ、自分でも。少しはね。ニーチェがそう言っているから、そ

れが正しいと思えないからそう生きるって馬鹿か、と面と向かって酒席で親友に茶化されたこともある。しかし、これはこれから長く長く論ずることになりますが、テキストというのはそのように向き合うものです。そのように向き合う他ないものです。読むというのはそれくらいのことです。(『切りとれ、あの祈る手を』26頁)

とは言え、テキストを復権させるとは、具体的には、どうしたらいいのでしょうか。私に言えることは、あまり多くはありません。一つには、本稿では、今私たちを取り巻く状況の解説にとどめ、そこから先の「処方箋」は、読者の解釈や創造力に任せたいということもあります。言葉少なにはなりますが、少しだけ述べてみましょう。

今まで見てきた諸革命の中に、そのヒントは隠されていると思います。

まずは、本を読むことです。……当たり前すぎるでしょうか。でも、私たちは多忙な現代人です。仕事に追われ生活に追われ、まともに本を読めない人もいるのではないのでしょうか。私たちはまず、本を読むところから始めないといけません。

それができたら、あとはできるだけ「原初の」テキストに近い書物を読むのがいいでしょう。古文書を読めというわけではありません。文字面を追っていけばそのまま意味が取れてそれ以上の何者ももたらさない——情報としての書物ではなく、「深い読み」を必要とする、書かれていないところを想像力で補ったり、他のテキストを参照することでより豊かな意味が見せたりする——テキスト(「編まれたもの」)であるところの書物です。例えば、文学。文学とは「書かない芸術」だと言います。書かれない部分にある物語を読者に委ねるのだと。これ以上の「テキスト」はないでしょう。

あるいは、聖書や四書五経などの信仰や道徳的プリンシプル(「徳」)にまつわる——「神聖な」テキスト。何も信仰を持ちなさいというわけではありません。佐藤優氏は、キリスト者でない者が聖書を学ぶ意味として、政治家・菅直人氏を批判的に分析する場合の例を挙げ、同氏が政治に夢や理想を託すことを最初から諦めている「情勢論者」であるということ前置きした上で、次のように述べています。

思想史の系譜で見た場合、菅氏の発想が戦前、陸軍(当時、影響力が最も強かった官僚集団)と提携した左翼政党・社会大衆党と親和的だと私は考えている。菅氏の元で21世紀型の日本ファシズムが育まれるかもしれない。(中略)この危険から抜け出すために、一方において、現在の社会の構造を冷静に、存在論的に分析し、他方において、目に見えるこの社会を支える背後にある「見えない世界」を感知する力を取り戻さなくてはならないのである。いまここで新約聖書を読む意味は、まさにこの焦眉の課題を解決するためののだ。(『新約聖書』I 所収「非キリスト教徒にとっての聖書——私の聖書論」 353頁)

佐藤氏がいう「見えない世界」を感知する力とは、原初のテキストに触れていた人々がもっていた力のことでしょう。そして、そうしたテキストを読み解くことが、現下の政治情勢を読み解く力にもなるということです。が、私たちが重要視したいのは無論前者の方で

す。「中世解釈者革命」以前の人々が、自然にもっていた情報ならざるテキストのメッセージを受け取る力、それを私たちも受け取れるようになるためのヒントが、原初のテキストそのものである聖書や、その他の「神聖な」書物に隠されているのではないのでしょうか。

しかし、読むということ、それを情報として受け流さないで、受け取るということは、読む側にも、プリンシプルを要求するのだと思います。佐藤優氏はキリスト者です。ですが、繰り返しますが、聖書を読むのに当たってキリスト者である必要はない。しかし、儒教でも仏教でも、マルクスでも、何でも良い。何らかの知的な意味での「骨格」がない人が、それを我が身に受け取ることは難しいでしょう。

さて、自らが本を読めるようになったら、それを人に広められるようにしましょう。私も実践が追いついていないので、大きなことは言えません。ここでは、松浦晋也氏のことばを引いてみます。

地域の知の集積地になるということは、同時に地域における「知のキュレーション機能」をも果たすということだ。おそらくこれこそが、電子書籍時代の、公共図書館の新しい役割ではないだろうか。キュレーションとは、本来、博物館や美術館における資料の管理・研究と展示作業のことを意味する。キュレーションを行う職業をキュレーターという。日本語では単に博物館や美術館の職員ということになってしまいが、本来は高い専門知識を持つ者にしかできない仕事だ。(中略)つまり、キュレーションとは、知識を整理し、保管し、なおかつ分かりやすく人々に提示する一連の作業のことである。(中略)とは言え、「知のキュレーション」とは抽象的なスローガンでしかない。それが具体的にどのような作業になるのかは、個々の公共図書館で今後真剣に考えていく必要がある。(松浦晋也「電子書籍についての考察(その11) 公立図書館の役割はどう変わるか」)

この一文を読んだとき、まさにさもありなんと膝を打ったものです。

ここで私なりにこれからの図書館におけるキュレーションとは何かを述べるとすると、それは「書物に言及する(refer)」ということです。「言及」の実際上の形式はどのようなものでもいいと思います。書評を書いてもいいでしょう。本の展示でもいいでしょう。あるいは、「選書」という行為も、実質が込められていれば、言及するという行為の一種とも言えると思います。最近流行のビブリオバトルもあります。

ともかくも図書館司書が書物に言及すること。これが本旨です。日本の図書館界に特有の事情なのかどうか、私は不勉強でわからないのですが、日本図書館協会が採択した「図書館の自由に関する宣言」があります。これ自体はとても良いものだと思います。しかし、戦前に思想善導機関になった反省から、戦後の図書館では図書館職員が書物の中身に言及することに対して、過度に臆病になってきた歴史があったのではないのでしょうか。経済の高度成長によって書物の点数もうなぎのぼりになり、とても司書が一つ一つの書物に言及できるような状況でもなかった。しかし、それをある種言い訳にして、私たちはこれまで書物に言及することを避けてきたのではないのでしょうか。図書館の「価値中立」とい

う言い方をする方もいます。その結果として、書物は「情報」にすぎないものとするに手を貸してしまった。今こそ、言及する——キュレーションを実践する、ということが必要ではないでしょうか。

さて、あと少しだけ言葉を費やしてみましょう。

例えば、資料目録（OPAC）はどうでしょうか。OPAC はキーワードを入れて、キーを叩けば一瞬にして書物をリストアップしてくれます。まさに、これ以上ない、至れり尽くせりの夢の様な目録。しかし、目録とは、そも、何のためにあるのでしょうか。図書館資料を容易に探し出せるようにするため——？ もちろん、それが大きな目的です。しかし、それだけでしょうか。かつて、テキスト的なあり方として、資料目録が存在したことはなかったのでしょうか。例えば、高島俊男氏は漢籍の四部分類について、次のように言っています。

中国における書物の分類は二千年も前から始まっているが、西洋式分類とは考えかたがちがい、書物のランクづけである。より正しい、より尊い本から順に並べてゆく。伝統的分類法では、一番は「経部」であって、『易』にはじまる儒家の經典が並ぶ。（『中国の大盗賊・完全版』310頁）

漢籍の目録では、書物が尊さ——神聖さ、重要性の順に並べられていた。これは別に昔に限ったことではありません。1963年出版の『京都大学人文科学研究所漢籍分類目録』では、当然のことのように四部分類法が採用されています。つまり、漢籍の目録では、キュレーションがなされていたのです。しかし、書物の価値付けを行うことは、戦後の図書館界が最も自戒してきたことではなかったか。「思想善導機関」に陥らず、しかし、書物を「情報」として受け取る愚も犯さず、テキストとして蘇らせ、キュレーションをおこなう。この隘路をすり抜ける道を私たちは見出さなければいけません。さもなくば、スローターダイクの言うように、人文主義者たちの憩う場としての図書館は死に、私たちの手元には無味乾燥な「情報」が残されるだけです。

漢籍の世界では、ずっと四部分類が使われていたから、戦後もそれに従っただけだというような皮相的な理由ではありえないことは、きっとおわかりいただけるでしょう。スローターダイクに教わるまでもなく、書物を読むということは、過去と対話することです。そのときの政治状況が、価値観がどうであろうと、書物を読むということは、それが書かれた文脈や背景——文化に寄り添って、摂取するということです。四部分類によらずに西洋式分類でバラバラに分解された漢籍は、果たして漢籍と呼びうるものでしょうか？

改めて、基本的な言明をしておいた方が良いでしょう。書物の価値付けを行わないことと、人文主義的に書物を扱うということは、要するに、根本から矛盾するということです。書物とはそもそも——スローターダイク流に言えば——「人間を飼い慣らす」ために存在しているのですから。戦後の図書館——というような大きくくりな批判が私などに許される

ならの話ですが——は、戦前、迷路を抜け出すのに失敗したため、過度に臆病になり、いかにも日本人的な逡巡の結果として、戦後は、新たな出口を探すのではなく、最初から迷路に挑むのをやめてしまっていたのです。

脇道にそれてしまったようです。目録の話でした。目録が四部分類によってなされていた時代の人々は、書物を価値の順番で並べる以上、すべての書物の中身を知って、掌理していたのです。これは、重く受け止めなければなりません。実際のところ、今更 OPAC をやめるわけにはいきません。しかし、様々考えようはあるのではないのでしょうか。「次世代 OPAC」には、キュレーションの機能は含まれているのでしょうか。あるいは、OPAC それそのものは別にして、かつて目録が担っていたものを何らかの別のもので取り戻すように考えてもいいかもしれません。——あくまでも、可能性の話です。

本稿の初めに、司書の役割とは書物に言及することだと申しました。結局は、紙面を費やし、同じ結論ということになりました。これは、言ってみれば当然のことなのです。私たちは、初めに理想的司書である足助素一から出発したのですから。しかし、ここに至る道程は無駄ではなかったと、私は思うのですがいかがでしょうか。

おわりに

本稿は、ある意味で中途半端な書き物です。図書館職員の方に向けたものとしては、哲学用語を説明もなしに使っており、少々わかりづらいかもしれません。現代思想に取材したエッセイと言うには、そもそも原典すら参照しておらず、箸にも棒にもかからないものです。本文中に述べたように「信仰告白」ですので、ご容赦いただければ幸いです。

本稿を構想した段階では、宮下氏のような、テキスト学の研究者の書物を中心に論を進めていければと考えていました。しかし、スローターダイクとルジャンドル(佐々木中氏)との出会いによって、このような、自分にとっては少々場違いな書き物となりました。これも書物との一期一会のなせる業かと思います。

おそらく、同業の方が本稿を読まれた場合、多くの方が気づかれるとおもいますが、本稿で述べたことは選書理論に関する議論と隣接しています。

最近の代表的選書論として、しばしば言及される安井一徳氏の著作から、失礼を承知で、結論部分のみ引いてみましょう。

そもそも「図書館」という機関の存在自体が、読書や情報活動を「善いもの」とする社会的価値の産物なのであり、そのような価値観を市民に対して表明しているのだ。(中略) 要求論的立場が暗黙の前提としている価値は、一種の「ヒューマニズム」と呼べるものであった。だが要求論的立場ではそれが意識化されず、「普通」や「常識」として批判することを許さない概念となっている。それが意識化され、批判に開かれたものになるなら(例えば「ヒューマニズム」の立場は何通りもありうる) 要求論的立場も一つの基準として成立するだろう。

(安井一徳『公共図書館における図書選択の理論的検討』60頁)

本稿の立場は、理想的には、司書たるもの、足助素一のように、すべての図書について掌理し言及すべしということですから、しいて選書論の価値論／要求論の対立軸に置き換えれば、価値論に属します。しかし、安井氏はヒューマニズム（人文主義）を要求論の依拠するものとして挙げています。これをどう整理するべきでしょうか。しかし、それを解きほぐすには、紙数が足りないようです。次の機会への宿題としておきましょう。

本稿の内容を一言で言えば「情報」を批判し、テキストへの回帰を求めたものです。しかし、かと言って、例えば個人としての私が、すぐさま情報を断ち切れるかということ、そうはならないと思います。特に大学図書館という職場は、公共図書館に比べても「読書」より「情報」を求めている人が多い場所ですから。しかし、だからといって、まるで盛り場で張り上げる大声のように、ここで述べたことが公的な実践と一切関わりあいのないものだとは、毛頭思っておりません。

端的に言って、「情報」は図書館員の頭を上を素通りして、それを提供するベンダーから利用者へ直接流れていってしまいます。情報リテラシーを教えることに役割を見出そうとしても、それは利用者にリテラシーが欠如していることにすぎた図書館の「職探し」に過ぎないということになってしまいます。本質的に、文化肥沃化の基地として、宛先の無い手紙を保管しておく郵便局として、図書館の本質的な役割を取り戻すにはどうしたら良いか、ということを実際に考えていかなければならないと思います。

最後に、本文に盛り込めなかったブックガイドを。

テキストの膨張をもたらした原因について、本文では「近代の三角形」がもたらしたという漠然とした説明しかできませんでした。岡田斗司夫『ぼくたちの洗脳社会』は、テクノロジーの進歩が社会のパラダイムを変え、コンテンツが氾濫し、人と人の関係、人とコンテンツの関係が「浅く広い」ものになっていくことを、見事に予言した本です。

1995年という、まだインターネットが黎明段階のころにこの本が書かれたことに、驚きを禁じ得ません。インターネット登場後のテキスト／コンテンツの膨張の理解については、本書を良書として紹介しておきます。

参考文献

<書籍>

ニコラス・カー著、篠儀直子訳『ネット・バカ』2010／浜本満・浜本まり子共編『人類学のコモンセンス』1994／池澤夏樹編『本は、これから』2010／井波陵一『知の座標 中国目録学』2003／宮下志朗『書物史のために』2002／仲正昌樹『集中講義！日本の現代思想』2006／岡田斗司夫『ぼくたちの洗脳社会』1995／岡田斗司夫『なんでコンテンツにカネを払うのさ？』2011／佐々木中『切りとれ、あの祈る手を』2010／佐藤優解説、新共同訳『新約聖書』I, 2010／ペーター・スローターダイク著、仲正昌樹編訳『「人間園」の規則』2000／高島俊男『中国の大盗賊・完全版』2004／津野海太郎『電子本をバカにするなかれ』2010

<雑誌論文>

藤島隆「貸本屋独立社とその後継者たち」、『北海学園大学学園論集』, 133: 37-75, 2007

下西善三郎「古典文学の受容における漱石・龍之介の位置」、『上越教育大学研究紀要』 23(2):

856-843, 2004

<インターネット>

佐藤秀峰. "「ブラックジャックによろしく」原画展のお知らせ". 漫画 on Web.

<http://mangaonweb.com/creatorDiarypage.do?cn=1&dn=34269>, (参照 2012-10-23)

松浦晋也. "電子書籍についての考察(その11) 公立図書館の役割はどう変わるか". 人と技術と情報の界面を探る.

<http://pc.nikkeibp.co.jp/article/column/20101025/1028128/>, (参照 2012-10-23)

安井一徳. "公共図書館における図書選択の理論的検討".

<http://plng.p.u-tokyo.ac.jp/text/yasui/yasui-yoshi.html>, (参照 2012-10-23)

楽天株式会社 "Raboo サービス終了のお知らせ". Raboo.

<http://ebook.rakuten.co.jp/event/raboo-info/>, (参照 2012-10-23)